

金曜日の朝。平日最後というだけで、街の空気がほんの少し軽く感じる。それに、今日を乗り切れば三連休だ。前向きな気持ちにもなれる。

満員電車に押し込まれながら、私は心の中でガッツポーズをした。

今週は担当先の新規契約が二件も決まって、正直へとへとだ。この連休は誰にも会わず、家で好きなものを食べて、好きなものを使って、ぐうたら過ごす。それだけを楽しみに一週間走ってきた。

(それに、昨日ポチったアレも、今日には届くし。楽しみだな……♡)

思わず口元が緩みそうになって、慌てて引き締める。満員電車で一人ニヤついている女なんて完全に不審者だ。隣のサラリーマンにちらっと視線を向けられて、慌てて視線を窓の外へ逃がす。ガラスに映った自分の顔は、幸い、いつも通りの顔をしていた。

「おはようございまーす」

会社に着いて、フロアに入る。

営業部の朝はいつも慌ただしい。電話の音、コピー機の稼働音、先輩たちの声。誰かが「今日中に見積もり出さないと」と焦った声を上げていて、別の誰かが「例の案件、先方から連絡来た？」と早口で確認し合っている。

この慌ただしさに揉まれていると、脳がだんだん仕事モードに切り替わっていく感じがする。

でもその前にコーヒーだ。

デスクに鞆を置き、パソコンを立ち上げて、給湯室へ向かう。

「あ、木下。おはよう」

背後から聞き慣れた軽い声。

振り返ると、同期の澤白逢人が立っていた。今日もきっちりと高そうなスーツを着こなして、営業スマイルの完成形みたいな顔で笑っていた。

「朝のコーヒー？」

すっと通った鼻筋、切れ長の目、笑うと少しだけ覗く八重歯。パーツの一つひとつが整いすぎていて、初対面の取引先の女性がぼーっと見惚れているのを、何度も目撃したことがある。

同期の女子の中には「澤白君、正直タイプ……」と本気で照れながら告白してくる子もいたし、他部署からわざわざお茶を持って挨拶に来る先輩女子までいる始末だ。

要するに——顔もスタイルも、社会人としてのスペックも、全部が反則級に揃った男。それが澤白逢人という同期だった。

「澤白……。そ。コーヒー淹れようと思って」

そう挨拶を返したところで、澤白がふっと目を細めた。

「木下、それ寝癖？」

「……は？」

「後ろ。ぴょこんってなってるぞ」

思わず手を伸ばして後頭部に触れる。

跳ねてる。

しっかり跳ねてる。指先に、明らかに一房分だけ主張の強い髪の毛が引っかかった。しかも結構な角度で。

（うそ、うそうそうそ！朝あんなに急いで出てきたから、鏡ちゃんと見てなかった……！）

かあっと顔が熱くなる。今朝はアラームを二回止めて、慌ててシャワーを浴びて、髪を乾かすのもそこそこに家を飛び出した。玄関の姿見でチラッと確認したときは前しか見ていなかった。まさか、後頭部が……！

「それで電車乗ってきたの？ 周りから注目集めたんじゃない？」

「そ、そんなことはないし！」

「お前が気づかなかっただけで、隣のリーマンとか見てたかもよ？ 結構目立つしさ」

「うそ！」

（じゃ、もしかして隣にいたサラリーマンの人が見ていたのって、寝癖！？）

なんで澤白だけがこんな絶妙なタイミングで気づくの。しかも指摘してくるのが、朝一番。この後の一日、ずっとこれを引きずるやつじゃん、私。

「相変わらず可愛いな～、木下って」

「っ、ムカつく～！」

思わず本音が漏れる。澤白はけらけら笑いながら「ひでえ～」なんて言って、自分のデスクの方へ歩いて行った。去り際にひらっと手を振っていく余裕っぷりに、余計に腹が立つ。

（もう最悪！）

給湯室に駆け込んで、備え付けの小さな鏡で後頭部を確認する。うん、しっかり跳ねてる。思ったよ

り深刻な角度。水で軽く濡らして押さえないと、たぶん一日中このままだ。手ぐしで必死に押さえながら、ちらりとフロアに視線を戻した。

澤白は先輩とにこやかに談笑している。爽やかな笑顔、丁寧な相槌、絶妙なタイミングの冗談。

うん、いつもの「できる同期」の顔だ。

先輩が何か言うたびに、頷いたり、目尻を下げたり、たまに軽く肩を揺らして笑ってみせたり。あの反応の一つひとつに、温かみがある。だからこそ、みんな澤白のことを「イケメンだけど、いいやつ」と話すんだろう。

(でも、私には優しくしてくれない……)

ふと、そんなことを考えてしまう。

澤白は誰にでも優しくて、誰にでも人当たりが良くて——なのに私にだけ、意地悪なことばかり言ってくる。

(というか、昔からそうだ……)

過去のあれこれが脳裏をよぎる。

(まず、初めての飲み会でも、意地悪だった……)

入社式のあと、初めての同期飲み会。私が緊張で自己紹介を噛んだとき、隣に座っていた澤白が真っ先に「木下、今のちょっと発音が平安すぎる」と言っ
て、笑いをとった。その場の笑いをかささらったのは、間違いなくあいつのせいだ。あのとき、澤白は自分の番になったら綺麗にスマートな自己紹介を決めていて、私だけがオチ担当みたいになったのを、今でも根に持っている。

(新人研修のグループワークでも、意地悪だった……)

私が資料を床にぶちまけたら「うわ、木下って本当ドジだな〜」って一番に気づいて揶揄ってきた。資料は拾ってくれたけど、「この資料は重要なやつ。でも、これはなくても大丈夫。お前は真面目すぎ」

とか言って、私をダシに先輩の評価を掴んでいた。

（取引先のプレゼン練習だって、そうだ……）

私が緊張で「株式会社」を「かぶし、ぶかしき……」って囃んだのを、その後三日間、事あるごとに真似された。「かぶしぶかしき木下でーす」って。今思い出しても顔が熱くなる。しかも一回一回、微妙にイントネーションを変えて再現度を上げてくるから、周りの同期にまで伝染して、しばらく「かぶしぶかしき」がグループLINEのネタになった。あれで社会人としての尊厳がゴリゴリ削られた自覚がある。

（それに、この間だって……！）

昼休みにお弁当のミートボールを膝に落として絶望していたら、通りすがりに「あ、木下の昼メシ、床にお引越し中か？」って笑われた。ウェットティッシュをくれたのは嬉しかったけど、どうしていち

いち擲揄われないといけないんだろう。

——なのに。

同じ日の午後、他の同期の女子がコーヒーをこぼしたときも、さっとティッシュを差し出していた。後輩が凡ミスしたときも、フォローに回って笑って許してあげていた。

(私だけ……)

——私のときだけ、笑うだけ。優しくない。それどころか、追撃してくる。

(もしかして……嫌われてる、のかな)

胸の奥がちくつとする。

(せっかくの、同期なのに)

同期って、これから何十年も一緒に仕事する仲間なのに。

入社してからずっと、なんとなく澤白と気まずいままなのは、正直しんどい。他の同期と話しているときに澤白の名前が出るたび、みんなは「あいと、いいやつだよな」って言うのに、私だけ「……まあ、うん」って曖昧に濁してしまう。

そのたびに、なんだか自分だけ仲間外れみたいで少しだけ寂しい。

(……って、何しんみりしてるの、私！)

慌てて首を振る。鏡の中の自分を睨みつけて、心の中で言い聞かせた。

(別に、いいし！ 私だって澤白のこと、別に好きじゃないし！ 意地悪してくるやつなんて、こっちから願い下げだし！)

うん、そう。むしろラッキー。あんな軽薄そうな男に構われなくて済むんだから。優しくされたって、どうせ営業スマイルの延長でしょ。私はそんなの、

要らないもん。

（それより、連休！ 連休！ 今日届く『アレ』のこと考えよう！）

昨日ネットで注文した、新作のバイブとローターのセット。

ちょっと奮発した。レビューがすごく良くて、ずっと気になっていたやつ。湯船にゆっくり浸かって、ワインを開けて、ベッドで新しい玩具をじっくり試す。

想像しただけで、楽しみすぎてちょっと頬が緩む。照明を落として、加湿器を焚いて、スマホの通知は全部オフにして。誰にも邪魔されない、私だけの完璧な夜。想像するだけで、さっきまでの寝癖事件も、澤白のムカつく顔も、ちょっとだけ許せる気がしてくる。

（うんうん、私には秘密の楽しみがあるんだから♡ 澤白のことなんてどうでもいいし……！）

自分にそう言い聞かせて、寝癖を必死に手で押さえながら、デスクへ戻る。手のひらで髪を撫でつけながら歩く姿は、たぶん傍から見たらちょっと変だ。でも、この際仕方ない。

途中で澤白と目が合って、またにやっと笑われた。

「ムカつく……！」

——今日を乗り切れば、天国の三連休が待っている。あいつの顔なんて、あと数時間見ないで済む。

そう思って、私は今日一日を全力で駆け抜ける覚悟を決めたのだった。

——けれど、まさか。この数時間後に、あんなことになるなんて。

このときの私は、まだ何も知らなかった。

「お疲れさまです！」

ようやく定時になり、私はいつもより五割増しの

元気な声で挨拶をしながら、パソコンをシャットダウンした。

（配達完了メールも来てたし、あとは家に帰るだけ！）

今日の午前中は営業先を三件回って、午後は溜まっていた見積書作成と提案資料の修正でぐったり。でも、そんな疲れも、あと数十分で完全に消え去る。

「木下、今から帰るところ？」

背後から、また例の声。振り返らずにデスクを片付けながら、私は極力事務的な声で返した。朝の寝癖の件を、まだ許してない。

「まあね。ゆっくりしたいし」

「連休、何するの？ 木下」

カバンの取っ手を握った手が、ぴくっと止まる。

(なににする、って……)

まさか「新しく買ったバイブを試します」なんて言えるわけがない。私は精一杯の澄まし顔を作って、振り返った。

「別に。——家でゆっくりするだけだけど」

「へ～。インドア派だもんな、木下は」

「いいでしょ、別に」

「そりゃもちろん。けど、最低限来客には対応できるようにしておけよ」

「来客？ 別にそんな予定、ないし……」

にっこり。

その爽やかな笑顔に、なぜか一瞬、背中がぞわっとした。

……なんだろう。今日の澤白、いつもよりちょっとだけ、絡んでくるタイミングが多い気がする。気のせいかな。

「……ともかく、お先」

これ以上会話が続く前に、私はさっさとフロアを出た。エレベーターに乗り込むまで、なんとなく後ろを振り返らないように意識しながら。

扉が閉まる瞬間、ちらっと見えた澤白の顔が——いつもの営業スマイルじゃなくて、なんだかもっと悪いことを企んでいるような笑顔だったのは、たぶん、疲れて見た幻だ。

そう思いながら、私はエントランスを飛び出した。

* * * * *

マンションに着いて、エントランスの自動ドアをくぐり、エレベーターで五階へ。自分の部屋の隣に段ボールが積まれているのが見えた。

（あれ、隣？ 誰か住むんだ……）

段ボールの表面には「衣類」「本」といった手書きの文字。一番上の箱には、まだ剥がされていない引っ越し業者のシールが貼りっぱなしになっている。

うちのマンションはワンフロアに数世帯しかない小さめの物件で、住人の顔もなんとなく把握している。新しい人が来るなんて珍しい。

（今までは隣に人がいなかったから、声に気を使わなくてよかったのに……）

一度部屋に荷物を置いてから、マンション用の宅配ロッカーを確認しに戻る。

マンション用の宅配ロッカーの前まで来て、動きが止まる。

（あれ？ 荷物、置かれてない……？）

うちのマンションは基本、宅配ボックスに荷物が入れられる。それぞれの部屋番号が割り振られたロッカーがあり、そこに入るようになっている。

（あれ、あれれ？ 配達完了の通知は来てたのに…
…）

まさか、配達ミスだろうか？

急いで部屋に戻る。電気をつけて、鞆をソファに
放り投げ、自宅のパソコンの電源を入れる。配達ペ
ージに飛んで、配達員への連絡先を調べなければ。

ピンポーン。

そこで、インターホンが鳴った。

（もう、今忙しいのに……！）

モニターを覗くと、映っていたのは全然知らない
スーツ姿の男の人。

ではなく、いや、スーツは着ているけど、顔は思
いっきり見覚えのある人物だった。

（え。えっ。ええええっ！？）

心臓が飛び跳ねる。モニターの粗い映像越しでも、

その整った顔立ちと、絶妙に完成された笑顔は間違えようがなかった。

（なんで。なんで澤白がうちのインターホン鳴らしてるの。なんで、なんで……！）

パニックのまま通話ボタンを押すと、スピーカー越しに聞き慣れた軽い声が響いた。

「すいません、隣に引っ越してきた者なんですが」

「え、な、なんで……」

「木下？ ……実は荷物が間違って届いたみたいでさ。木下宛のやつ、うちに来ちゃったんだよ」

——……………え？

思考が一瞬止まる。

木下宛の、荷物。今日届く予定だった、木下宛の。
うちに、来ちゃった。

（——えっ、待って待って待って！！！）

血の気が一気に引く。

手足の指先まで、すうっと温度が下がっていく。
心臓だけが逆に、ばくばくと嫌な速さで暴れ出す。

（今日届く予定の荷物って、それって、あの、その、まさか、あの箱じゃないよね！？ 別の荷物、そう、別の何か、たとえば、えっと——ううん、他に注文したものなんて何もない！！）

「——っ、ちょ、ちょっと待ってて！！」

叫ぶように言って、私は玄関に飛んでいった。

裸足のままサンダルを引っ掛けて、髪も整えないままドアを開けようとして、いや待って落ち着け、深呼吸、深呼吸。

ドアノブに手をかけたところで、一度深く息を吸い込む。鏡でざっと自分の顔を確認する余裕もない。とにかく、あの箱を回収しないと。中身を見られる前に、絶対に。

（お願い、お願いだから、中、開けていませんように……！！）

祈るような気持ちでドアを開ける。

玄関の前にいたのは、やっぱり澤白だった。

さっきまで会社で見ていたスーツ姿のまま、片手にそこそこ大きな段ボール箱を抱えて、私の部屋の前に立っている。マンションの共用廊下の白い蛍光灯の下でも、その姿はやっぱり嫌になるくらい様になっていた。まるで、モデルの撮影現場かなにかみたいに。

「よ」

軽い挨拶。

でも、その口元が――

にやっと、笑っている。いつもの意地悪な、あの笑い方で。

「というか、というか！ 澤白、なんでここにいる

の……！？」

「あ、言ってなかったか。俺、今日からここ住むんだよ。木下と同じマンションだったんだな、びっくりしたわ」

「はっ！？」

「隣の部屋。よろしくな、お隣さん」

にっこり。営業スマイルの完成形。

（嘘でしょ。嘘でしょ嘘でしょ嘘でしょ！！）

さっき廊下で見た、あの段ボールの山。あれ、澤白の荷物だったってことだろ。

「そ、それより、荷物っ……！」

震える声で、私は箱を指差す。澤白の腕の中で抱えられている、明らかに私宛のあの段ボール。

「あ、これな。伝票見て木下の名前だったから、届

けに来ただけ——」

そこで澤白が言葉を切って、意味ありげに私の顔を覗き込んだ。

「木下、顔真っ青だぞ？ 大丈夫か？」

「だ、大丈夫……！ それ、それ返して……！」

手を伸ばす。震えている。指先まで震えている。なんで、よりによって、澤白なの。他のご近所さんでも、宅配業者のミスでもよかったのに。よりによって、この世で一番中身を知られたくない相手に。

澤白は箱を私の手が届かない位置へ、すっと持ち上げた。

「ん～？ どうした、そんな慌てて。——もしかして、中身、見られたくないやつか？」

——っ。

心臓が止まりそうになる。

「べ、別に、そんなの……！」

「ふ～ん」

そこで澤白は、ちらっと箱に視線を落とした。

私も釣られて視線を落とす。

明らかに、一度開けられている。元々の段ボールの折り目とは違う角度で、透明なテープが斜めに貼り直されていた。

「……そ、それ」

「悪いな、俺宛かと思って開けちゃったんだよ」

「——っ！！！！！！」

顔から火が出るってこういうことか、と初めて実感した。

耳の先まで、首筋まで、鎖骨のあたりまで、たぶん今、全部真っ赤になっている。頭の中の血管がぷちぷち鳴っている気がする。

（じゃあ、見た？ 見たの？ 中身？ あの、パイプと、ローター——）

「うそ、うそ、うそうそうそ……！」

「意外。木下、こういうの、使うんだな？」

意地悪く、心底楽しそうに、澤白が微笑んだ。

その顔は、いつもの会社での「爽やかな澤白」でもなく、私にいつも向けられる「意地悪な澤白」でもなく——なんだか、もっと質の悪い、獲物を捕まえた獣みたいな顔だった。

「……〜〜っ！！！！！」

私は反射的に澤白の腕から箱を奪い取ろうとしたけれど、身長差のせいで届かない。爪先立ちになっても、澤白がずっと避けるから、余計に届かない。澤白は片手で軽々と箱を持ち上げていて、もう片方の手はポケットに突っ込んだまま。私の必死の抵抗を、完全に遊びとして楽しんでいる。

「はは、必死じゃん」

「わ、笑わないで……！！お、お願い、内緒にして……！！誰にも言わないで……！！」

もう、恥ずかしさで泣きそうだった。

火曜から、どんな顔して会社に行けばいいの。同期の営業スマイル王に、私のこんな趣味知られたなんて。フロア中に噂を流されたら、私、もう二度と出社できない。想像するだけで胃がきゅうっと痛くなる。給湯室、ロビー、会議室、休憩スペース。どこに行っても、みんながこっちを見て、こっそり笑っている光景が脳裏をよぎる。

必死に頭を下げる私を、澤白はしばらく無言で見下ろしていた。

そして。

「……いいぜ、内緒にしてやる」

ふっ、と息を吐くように笑って。

「——その代わり、条件が一個」

「じゃ、条件……？」

嫌な予感しかしない。この男が「条件」なんて言葉
を口にするとき、ろくな内容じゃないことは、二
年半の付き合いで嫌というほど学習している。

顔を上げると、澤白は箱を軽く持ち上げて、私の
目の前でとん、と指で叩いた。

「これ、俺の前で使ってみせろよ」

「……………は？」

「聞こえただろ？」

「い、いま、なんて……」

「だから」

にっこりと笑う。でも、目の奥が全然笑ってない。

「今から。——俺の前で、これ、試せよ」

「——……………」

頭が真っ白になった。思考が完全に停止する。単語の意味は理解できるのに、それが一つの文章として意味を成す瞬間、脳が受け入れることを拒否している感じだった。

「なな、なにってっ……！？ む、無理！ 絶対無理！！ そんなの——」

「じゃあ、火曜に営業部で発表するか。木下の連休の過ごし方について」

「〜〜っ！！！！」

さらっと、天気の話でもするみたいに脅してくる。この男、絶対性格終わってる。しかも、その脅し文句を口にしながらも、表情は変わらず爽やかな営業スマイルのまま。だからこそ、余計に本気で言っているっぽさが増している。

「な、なんでそんな……！ 澤白、他人の趣味を晒すような人だと思わなかった……！」

「思わなかった？ けど、俺は木下のこと困らせる

の、けっこう好きなんだよ」

「うっ……！！」

知ってた。知ってたけど、それにしても直球すぎる。普段はもう少しオブラートに包んでくるくせに、今日はやたら本音を隠す気がない。それとも、これも新手の意地悪の一種なんだろうか。

「……～っ、ほ、他の条件！！他の条件にして！！」

「やだね。これがいい」

「な、なんで……！」

「なんでだと思う？」

「そ、そんなの、知るわけない……っ！」

譲る気ゼロだ。顔は爽やかに笑っているのに、目の奥だけが、ぜんぶ計算し尽くしたみたいに冷たく光っている。この目、知ってる。取引先との交渉で、絶対に譲れないラインを引くときの、澤白の『営業モード』の目だ。

私は震える手を握りしめて、必死に頭を回した。

断りたい。全力で断りたい。でも、断ったら本当に火曜に社内で言いふらされるかもしれない。あの顔で、あの営業スマイルで、澤白なら本当にやりかねない。というか、たぶん本当にやる。あの朝の寝癖ですらあれだけ引きずってくる男が、こんな最強のネタを手に入れて黙っていられるはずがない。

(うう、うう、うううう……！！)

拒否と羞恥と絶望が全部ぐるぐるする。頭のなかで天秤がぐらぐら揺れる。片方の皿には『火曜、営業部で公開処刑』の文字。そして、もう片方には『今夜、澤白の前で一回だけ』の文字。

……どっちも地獄だ。でも、片方は一晩で終わる地獄で、もう片方は退職まで続く地獄だ。

長い長い沈黙のあと、私は蚊の鳴くような声で――

「……い、一回、だけ、だから……！」

「ああ」

「ぜ、絶対、絶対誰にも言わないでよ……！」

「言わねえよ」

「わ、笑ったりも、しないで……！」

「それは約束できねえな」

「〜〜っ！！！！！」

もうやだ、この男。本当にやだ。そこだけは譲らないんだ、この男。しかも、しれっと。

でも、他に選択肢がない。

「……上がって」

私は、消え入りそうな声で言った。自分の口から出た「上がって」という言葉が、なんだか他人の声みたいに耳に響いた。

今、私、自分の部屋に、澤白を招き入れた。

——もう取り返しがつかない。

「じゃ、邪魔するわ」

そのあまりにも軽い挨拶に、私はもう、返す言葉もなかった。この状況で交わす言葉として、あまりにも普通すぎて。逆に、澤白がこの状況を心底楽しんでいるのが伝わってくる。

「いい部屋だな、木下」

澤白はにっこり笑って、片手で箱を持ち直しながら、当然のように私の部屋の玄関を跨いだ。革靴を脱ぐ動作すら、なんだか堂々としている。まるで、何度もこの部屋に来たことがあるみたいに。

「あ、あの、ほんとに、や、やっぱりナシって……」
「そういや、火曜の朝礼で俺から話したいことがあってさ。その時みんなに——」
「や、やるよ！ やるってば！！」

反射的に叫んでしまってから、自分の言葉に絶望する。

やりますって、何を。何を「やります」って言っ

たの、私。自分の口から出た「やります」の三文字が、部屋の壁に反響して、耳に返ってきた瞬間、頭を抱えなくなった。

澤白は満足そうににっと笑って、箱を軽く持ち直した。

「じゃあ、寝室に案内してくれよ」

「し、寝室！？」

「ベッドの方がやりやすいだろ？ リビングでもいいけど」

正直、どっちも嫌だ。

でも、どっちも嫌だけど、リビングなんてもっと無理だ。リビングは窓もあるし、電気の明るさも調節できない。せめて寝室のほうが、照明を落とせる分だけ、まだ少しはマシ……いや、マシじゃない。どっちにしろ、地獄だった。

「……こ、こっち」

か細い声で言って、私は寢室へ向かった。

背後から澤白の足音がついてくる。それだけで、耳の奥がじんじん熱くなる。廊下のわずか数歩の距離が、やたらと長く感じる。振り返らなくても、視線が背中に張り付いているのがわかる。

寢室の扉を開ける。シングルベッド、シンプルなベッドカバー、枕元の間接照明。

普段は私だけの空間。今夜、そこに澤白がいる。想像しただけで気が遠くなりそうだ。

朝、慌ててベッドから飛び出したままの少し乱れたシーツ。枕元に置きっぱなしのハンドクリーム。全部、全部、澤白の目に晒される。

「へえ」

澤白がベッドの縁を軽く指で撫でながら、部屋を見回す。その指の動きが、なんだか私の身体を撫でているみたいで、思わず身震いした。

「木下って、こういう清楚系な部屋なんだな」

「いいでしょ、別に！」

「それなのに、こういうおもちゃを使うんだ。ギャップやばい」

「っ、う、うるさい……！」

「褒めてんじゃん」

「褒めてない！！」

耳が焼けそうに熱い。

澤白はけらけら笑って、部屋の隅にあった一人掛けの椅子を、ベッドから少し離れた場所へ引き寄せた。そこにゆっくりと腰掛けて、脚を組む。ベッドを見下ろす、絶妙な距離と角度。まるで、劇場の特等席みたいに。

「はい。じゃ、俺はここで見てるから」

「……ほ、ほんとに、見るの？」

「見るために来たんだけど？」

「……っ」

顔が熱い。たぶん首筋まで真っ赤になっている。

澤白は膝の上に置いた箱から、ローターを一つ取り出して、ぽんと軽くベッドの上に投げた。ころんと転がるピンク色の丸い物体を、私は呆然と見つめる。

ネットの商品ページで見たときは、こんなに毒々しい色だと思わなかった。今シーツの白の上に転がっているそれは、なんだか私の下心そのものを可視化されたみたいで、直視できない。

「まずはそれからかな。ほら、始めろよ」

「……」

「木下？」

「……ま、待って、心の準備が……！」

「準備できるまで待ってやるほど、俺、優しくねえけど？」

「ひどい……！」

「知ってるだろ、俺の性格」

……知ってた。知ってたけど、こんな場面で発揮されるとは思わなかった。

入社してから二年半、散々思い知らされてきたはずの性格の悪さ。それがこういう場面で最大出力になるとは、想像もしなかった。

私は震える手でベッドに座る。

まだスーツのままだ。

着替えるなんて到底無理、上着だけそっと脱ぐのが精一杯。

ブラウスのボタンに指をかけようとして——ぴたっと止まった。指がボタンの上で凍りついたみたいに動かない。頭では「早く脱がなきゃ」って命令しているのに、身体が言うことを聞かない。

「脱がないの？」

「ぬ、脱がなきゃ、だめ……？」

「スーツシワになんない？ 服の上からやるのもエロいし、俺はそれでもいいけど」

「そ、それはやだ、けど……！」

「じゃあ脱げよ」

澤白はまるで面白いショーでも見るみたいに、頬

杖をついてこっちを眺めている。目の奥が、いつもの意地悪な色で光っている。

（……もう、いい。もう、やる。やって早く終わらせて、追い出して、忘れる！！）

自棄になった私は、ぎゅっと目をつぶって、震える指でボタンに手を伸ばした。

ブラウスのボタンをひとつ、またひとつと外す。指が言うことを聞かなくて、途中で何度も引っかかる。ボタンひとつ外すのに、こんなに時間がかかったのは初めてだった。

「白？ 下着も清純派なんだ」

「う、うるさいな！」

澤白に反論した勢いのまま、ローターに手を伸ばした。

手のひらの中でずしり、と重みを感じる。ネットで注文したときはあんなにウキウキしていたのに、

今は絶望の重さでしかない。『レビュー星4.8』『バッテリー長持ち』『静音設計』——あんなにワクワクしながら読み込んだ商品説明が、今は全部呪いの言葉みたいに脳裏をよぎる。

スイッチを入れる。

ヴィィィィッ♡

低い振動音が寝室に響いて、心臓が跳ねた。

静音設計、って書いてあったのに、今この部屋では嫌になるくらい大きく響いている。それとも、静まり返った寝室のせいで、大きく聞こえるだけなんだろうか。

「お、動きいいじゃん」

「……もう、黙って……！」

「わかったわかった。木下ちゃんのために静かにしてる。続けろよ」

そう言われて嫌々ながらに、ブラのカップの上からローターを当ててみる。

ブルルッ♡ ブルルッ♡

「ん……ッ♡」

振動が布越しに伝わってきて、思わず肩がびくった。布二枚越しでも、しっかり伝わる振動の強さに、レビューが星4.8だった理由を身をもって理解する。今、そんなことを実感している場合じゃないのに。

ヴィィィィッ♡

「ふ～ん」

椅子の方から、面白そうな声。

「木下、おっぱいからイクタイプ？」

「——ッ！！ な、なんてこと聞くの……！！」

「だってさ、乳首でいくまで続ける感じだろ？」

「……っ！！」

言い返せない。だって家で一人で試すときもいつも最初は乳首でいくから。

まさか身体の癖がこういう意味で露呈するなんて。

「まあ、続けろよ」

「……んっ、う……ん♡」

ブルルっ♡ ブルっ♡ ブルっ♡

ブラのカップの上からゆっくり動かす。乳首の位置に当てた瞬間、ぴりっとした甘い痺れが走って、思わず息が漏れた。ブラのレースの模様越しに、点で当たる振動。それだけなのに、身体の中心を貫くみたいな刺激が走る。

「ん、……あっ♡」

「あ、今、声出た」

「で、出てないっ……！」

「出てたぞ。ちゃんと聞いてたし」

私の反応を全部見て、全部聞いている。それを実況までしてくる。

羞恥で頭がおかしくなりそうなのに、身体は情け

ないことに、いつもより熱を持ち始めている。『見られている』という状況が、こんなにも身体を反応させるなんて今日まで知らなかった。よく漫画で見かける展開なんて、むしろ逆だと思っていた。恥ずかしければ、萎えるはずだって。

なのに、実際は違う。

「もっと直接当てなきゃ、意味ねえだろ」

「い、意味って……！」

「ブラの上からじゃ、伝わりきらねえじゃん。外せよ」

「な、なんで澤白に指示されなきゃ……！」

「火曜、営業部で——」

「わ、わかった！！ わかったってば！！」

ブラのホックに手を回す。けれど躊躇ってしまっ
て、うまく外せない。

「手伝ってやろうか？」

「い、いらない！！ 触らないで！！」

「じゃあ早くしろよ」

必死になんとかホックを外して、ブラを緩める。カップがずれて、素肌が空気に触れた瞬間、鳥肌が立った。寝室の空気は決して寒くないはずなのに、皮膚がぴりぴりと敏感になっている。前を隠すように腕を交差させると、澤白が小さく笑った気配がした。

「ちゃんと見せろよ、木下」

「……っ、うう……」

「何のためにここまで来たと思ってんの、俺」

「わ、私が呼んだわけじゃ……！」

「呼ばれる前提で来たわけじゃねえけど、来た以上は最後まで見るから」

絶対、そんなの笑顔で言うことじゃない。

私は涙が滲みそうになるのを堪えながら、ゆっくり腕をどけた。ブラを完全に外して、傍らに落とす。ブラウスの前は開いたまま、上半身が半分だけ露わ

になる。シーツの上に落ちた白いブラが、なんだか脱ぎ捨てられた自分の理性みたいに見えた。

「……うわ、えろ」

椅子の方から、少しだけ低くなった声。

さっきまでのおちゃらけた笑いじゃない、なんだか——熱を含んだような、そんな響き。その声の変化が、私の身体をまた一段、ぞくっと震わせた。からかわれているのとは違う、もっと、こう『見られている』って実感が、急に生々しく突きつけられた気がして。

「綺麗じゃん、木下」

「そ、そういうの、いない……！」

「褒めてんのに？」

「褒めなくていいから……！」

「はいはい。続きは？」

促されて、私はローターを胸に持っていく。今度

は、素肌に直接。

ブルルルッ♡

「ひあっ♡♡」

さっきの布越しとは全然違う。振動がダイレクトに乳首に伝わって、腰まで甘い痺れが駆け抜けた。布一枚あるだけで、こんなにも刺激が違うんだと、身体で理解する。

こり♡ こり♡ こり♡

ローターの先端が乳首を掠めるたび、勝手に身体がびくびくと跳ねる。

「あっ♡ あ、や……ッ♡ んうっ♡♡」

「あ、今の顔いいな」

「み、見ないでっ♡」

「見るために来たんだって」

「う、うう……っ♡」

ブルっ♡ ブルルッ♡ こりっ♡ こりっ♡ こりっ



反対の手で口を押さえながら、私はローターを動かす。ぴりっ♡ぴりっ♡と身体が反応するたびに、椅子の方から視線がじっと注がれているのがわかる。物理的に触れられているわけじゃないのに、澤白の目線が肌をなぞっているのが、はっきりわかる。

「ああ、あん♡ん、んっ♡♡や、あ……♡」
(や、やだ、澤白に、見られてるのに……！)

見られているのに。意地悪な同期に見られているのに。恥ずかしくてたまらないのに。

なのに身体は一人でやるときより、明らかに感じている。それを認めたくなくて、必死に「これは違う」って自分に言い聞かせる。

ぷっくり尖った先端に、ローターの丸みが吸い付くように押し当たる。

こりゅっ♡こりゅっ♡ぷにゅ♡ぷにゅ♡

「んひいっ♡♡や、ああ……っ♡♡」